

## 「今鏡」の「聞こゆ」

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 明治大学教養論集刊行会 公開日: 2009-04-15 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 川岸, 敬子 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10291/5219">http://hdl.handle.net/10291/5219</a>

## 「今鏡」の「聞こゆ」

川 岸 敬 子

### 一 はじめに

筆者は前稿<sup>①</sup>において、「今鏡」の謙讓語「参る」に、当時一般には見られなかった用法のある可能性を指摘した。「今鏡」の謙讓語「聞こゆ」にも疑問例があるので、今回「聞こゆ」全体の使用状況を調査することにした。

院政期における謙讓語「聞こゆ」(「聞こえさす」)については、桜井光昭氏が

聞コエサス、聞コユ(前者の方が敬度が高い)は『大鏡』には用いられているが、『今昔物語集』では、前者は用例がなく、後者は少数用いられている。それらのほとんどは、話し手または聞き手が女性で、敬度の低い、古風または卑俗な言葉と考えられる。第四章にも述べるごとく、今昔のころを境に話し言葉から退き始めたものであろう<sup>②</sup>。と述べている。また、穂田定樹氏は、主に「今鏡」<sup>③</sup>の用例を挙げながら、「聞こゆ」の変質について指摘している<sup>④</sup>。

本稿は、『日本国語大辞典 第二版』「きこえる」<sup>⑤</sup>の項の記述を参照し、「今鏡」の「きこゆ」が各意味領域にどのよう分布しているか、疑問例はどのようなものか、について調査、検討した結果をまとめたものである。用例の検索は、

本文として畠山本を用いた『今鏡本文及び総索引』<sup>⑤</sup>によったが、筆者が補ったものもある。

## 二 概 観

『日本国語大辞典 第二版』「きこえる」の項では、次のように意味、用法が説かれている。(符号は改めたところがある。)

一

- ① 音声が耳に入る。聴覚に感じる。
- ② 聞いて、これこれだと受けとられる。聞いて知られる。
- ③ 意味がわかる。理解できる。納得できる。
- ④ 世に広く伝わる。評判される。
- ⑤ 嗅覚に感じる。におう。

二

(一) 他に対して言うのを、自然にその人の耳にはいるという自発表現で表わしたものを。人に言う。告げる。また、噂する。

(二) (一) から、言う対象を敬う謙讓語となったもの。一説に自己の「言う」動作を、相手に聞かれるという受身表現から転じたともいう。「お耳に入れる」気持の、間接表現から成立した敬語。

① 直接「言う」場合の、「言う」対象を敬う謙讓語。申しあげる。

② 人を介して、また、消息などで間接に「言う」場合の、「言う」対象を敬う謙讓語。伝言で申しあげる。お便り申しあげる。また、手紙などをさしあげる。

③ 自己の思いや願望などを知らせる、また、言いよるなどの意の謙讓語。望みなどを耳にお入れ申しあげる。お願い申しあげる。お望み申しあげる。

④ その人の名、また、地位、状態などを世間の人が……と申しあげるの意で、呼ばれる人を敬う。

イ 名前や地位などを……と申しあげる場合。

ロ その人が……と呼ばれるある地位、状態にあるの意で、……と申しあげる場合。

⑤ (近世文語文で用法が変化し、相手の自己に対する動作に用いて)聞かせる。聞かせてくれる。

(三) 補助動詞として用いる。他の動詞に付いて、その動詞の動作の対象を敬う謙讓語。……申しあげる。

右の各項目に該当する「今鏡」の用例と用例数を挙げる。用例がない項目は立てない。

一 ①の用例……一三例

例一 奥の方に、わざとなくて、箏の琴つま鳴らしして、たへぐ聞えけり。(二一四頁三行)

例二 うちに源氏よみて、「榊こそいみじけれ」「葵はしかあり」など聞えけり。(二一四頁六行)

②の用例……二二例

例三 「大原の滝の歌こそ、いとをかしく聞えしか」と侍りけるに、(二八五頁一五行)

例四 「……『年はもくとせあまり、世は十つき』とあれば、十つきといはゞ、大同の御代と聞ゆるに、……」(二八九頁六行)

④の用例……四〇〇例

例五 御子たちも、をのく道にとりて、才をはしますと聞へさせ給へるこそ、(八〇頁一四行)

例六 日野、三位の女にて、世おぼえもことのほかに聞へ給しかども、(四一頁一行)

例七 次に女房になりなどしてをはずとぞ聞ゑられし、今にかしこき人にて、(一一九頁七行)

例八 僧正御身の沈み給へることをおもほしける時、詠み給ける、(歌)とぞ聞え侍し。(二五〇頁七行)

例九 二条の帝、東宮と聞へさせ給し時、保元と年の頃、宮すどころと聞へ給て、(七四頁二行・三行)

例一〇 宮内卿有賢と聞えられし人のもとなりける女房に、しのびて夜くさまをやつして通ひ給けるを、(一六九頁六行)

例一一 小侍徒など聞ゆるは、小大進が腹にて、これはさきのはらからなるべし。(二五〇頁一四行)

例一二 比叡の麓に円徳院と聞ゆる御堂の御願文に、(五二頁八行)

二(二)①の用例……一一例

例一三 御前に参りて、「二の宮をば、いづれの僧にかつたてまつり侍べき」と聞ゑ給けるに、(二九頁一三行)

(二)②の用例……一例

例一四 時の関白のもとに消息たてまつりて、「宝蔵のやぶれて侍、修理して給はらむ」と侍ければ、……まなの御あはせどもとゝのえて、たてまつり侍ければ、「材木給て、やぶれたる宝蔵つくろひ侍ぬ」とぞ聞ゑ給ける。(二六

二頁六行)

(二)③の用例……一例

例一五 後の御姉にをはずれば、時く参り通ひ給につけつゝ、しのびて聞へ給事などもおはしけるなるべし。(二四

一頁一五行)

(二) ④の用例……三七例

例一六 此宮いつきと聞えてける頃、本院の朝顔を見給て、(一〇三頁八行)

例一七 その年の霜月の頃、中納言になり給て、やがて中納言中将と聞えき。(二三六頁九行)

(三) の用例……二二例

例一八 その人の、待賢門院を養ひたてまつり給て、院も御女とて、もてなしきこゑさせ給ひしなり。(一一六頁一五行)

六行)

例一九 御堂のおとゞの御もとにおはしましあひて、「かゝる夢こそ見侍りつれ」と、語りきこえ給ければ、(一四四頁

例二〇 白河の花見の御幸とて侍し和歌の序は、この大将殿書き給へりけるをば、世こそりてほめきこえ侍き。(二三六頁一五行)

次節で取り上げる、疑問例一〇例を含めると、五一七例の「聞こゆ」が「今鏡」には用いられているが、その約七七パーセントが「世に広く伝わる。評判される。」(一④)意の用例であり、謙讓語(一(一)(二)①④および(三)(三)の用例は七二例で約一四パーセントに過ぎない。それに対し、謙讓語(受手尊敬)の「申す」は五九七例用いられている。院政期における謙讓語「聞こゆ」の衰退の様相を示すものである。それでも謙讓語「聞こゆ」が七二例用いられているのは、「今鏡」の語り手が百五十歳を超えた老女であるためであろう。なお、「聞こえさす」の用例はない。

### 三 疑問例

このような転換期であったためか、「今鏡」には意味の取りにくい「聞こゆ」の用例がある。それらを取り上げて考察することにした。なお、考察にあたっては、海野泰男<sup>9)</sup>氏の口語訳、竹鼻<sup>10)</sup>氏の現代語訳も参照することにする。

例二一 村上の中務の宮の御子源氏の中将を、入道おとゞの御やしなひ子と聞え給。この度三位中将になり給き。(一頁二行)

海野氏、竹鼻氏は「きこえ給ふ」の後を読点にした上で、「源氏の中将を、入道大臣は御養子にしておいでになったが、」(海野氏 上三二頁)、「源師房中将を、入道道長公が御養子としてもてなしていらっしゃる、」(竹鼻氏 上六五頁)と訳している。「入道おとゞの」の「の」を主格を表すものと見るわけで、この場合「聞え給」は、源氏の中将を入道おとゞが(自らの)御やしなひ子と「申し上げなさる」が直訳になろう。とすれば、この「聞こゆ」は謙譲語である。穂田氏はこの用例を異例としている。氏は、

「人物・を——Aと——聞え給ふ」などとなることは稀で、あれば異例とも言うべき叙述である。<sup>11)</sup>

と述べている。「入道おとゞの」の「の」を所有格を表すものと見る立場である。「人物(源氏の中将)・を——A(入道おとゞの御やしなひ子)と——聞ゆ」ではないから、「……と申し上げる」意の謙譲語「聞こゆ」ではない。また、「人物(源氏の中将)」が主語でないから、「世に広く伝わる」意の「聞こゆ」でもない。その意味で異例となるということであろう。

筆者は穂田氏と同様の見方をしたい。「の」を主格を表すものとした場合、入道おとゞ道長に普通敬語「給ふ」が用いられていることになるが、この用例のある「すべらぎの上第一くも井」において、道長は最高敬語「せ(させ)給ふ」で待遇されている。「十月には、入道おとゞ比叡に登り給て、」(一一頁八行)が一例あるが、その文末は「御戒重ねて受けさせ給。」である。それに対して、源氏の中将は「この度三位中将になり給き。」のように「給ふ」で待遇されている。例二一の「聞え給」の「給ふ」は源氏の中将に用いられた尊敬語と見るべきであろう。

とすれば、例二一は「源氏の中将、……と聞え給。」とすべきところを、「源氏の中将を……と聞ゆ。」と混同した(あるいはその逆)結果生じた表現ということになる。海野氏、竹鼻氏のような立場もありうるが、混同例である可能性も大きいことを指摘しておきたい。

例二二 廿五日にぞ前の東宮に院号聞えさせ給て、小一条院と申。(一〇頁六行)

「前の東宮に」となっていることから、海野氏は「院号をさし上げて」(上二四頁)、竹鼻氏は「院号をお贈り申しあげなさって」(上五〇頁)と、いずれも「聞こゆ」を「贈る」意の謙讓語としている。前節で引用した『日本国語大辞典 第二版』「きこえる」の項二(一)②の中に「手紙などをさしあげる」があるが、「言う」意味の範囲でのことであろう。しかし、『角川古語大辞典』の「きこゆ」の項<sup>(12)</sup>には、

一④ハ 贈呈する意の謙讓語。手紙や品物をさしあげる。「同じ人におほえびをきこえさすとて」〔津守国基集〕とある。これによれば、「院号をさし上げる」があっても不思議ではない。前東宮が院号を受けるのであるから、「帝が前東宮に院号をさし上げなさって」がありえないとは思われない。

ただ、さし上げるのであれば、「太上天皇の御尊号奉らせ給。」(六四頁四行)のように「奉る」を用いるのが普通で



はないか。また、助詞「に」には、「あり場所を示すことによって、婉曲にそこにいる人が動きの主体であることを表わす」用法がある。たとえば「東宮にも行啓せさせ給ふ。」(一四頁一行)は、重病の道長のもとを孫の東宮(のちの後朱雀天皇)が訪ねるといふ内容である。それ故、例二二も「前東宮において、院号が世に広く伝わりなさって」のようにとることが出来る。この「聞こゆ」は「世に広く伝わる」意としておきたい。

例二三 応保元年十二月に、院号聞へさせ給き。(七三頁一五行)

例二四 皇后宮に立ち給後は、院号聞えさせ給ひて、高陽院と申き。(一一七頁二二行)

二例とも女院のことであり、例二三は八条院になった、二条天皇の母の内親王である。院号について「聞こゆ」を用いるのは、例二二を含め三例で、他には「院号ありて」三例、「院号えさせ給き」一例がある。

「院号聞こえさせ給ふ」は、「治暦二年二月陽明門の院と聞えさせ給。」(三九頁五行)などと共通した性格をもっていると考えうるので、例二三・二四も例二二と同様、「院号が世に広く伝わりなさった(なさって)」としたい。

例二五 このみかど寛弘五年長月の十日あまり一日の日に生れさせ給へり。同年の十月十六日にぞ親王の宣旨聞えさせ給ひし。同八年六月十三日東宮に立、せ給。(九頁六行)

後一条天皇について述べている。親王の宣旨について「聞こゆ」が用いられているのは、「今鏡」ではこの一例であり、他の用例では「受ける」意の「かぶる」「かうぶる」が用いられている。ただ、それらの場合、主語は姫宮(後の上西門院)、輔仁親王、寛行法親王、最雲法親王であり、後の帝の例はない。

なお、例二二のところで述べたように、「聞こゆ」に「さし上げる」意を認めるなら、「親王の宣旨をさし上げなさっ

た。」となるが、前後の文が後一条天皇を主語としているので、問題の文についても同様に考え、「親王の宣旨が世に広く伝わりなされた。」としてよいと考える。

例二六 年毎のつかさくらる、もとの如く給はらせ給。御隨身など聞え給き。(一〇頁七行)

例二二に続く部分である。前東宮が小一条院となったが、年官年爵はもとのままいただき、御隨身など「聞え給」うたというのである。海野氏は「御隨身などもつけてさし上げた。」(上二四頁)、竹鼻氏は「御隨身など賜わりなされた。」(上五〇頁)としている。例二二のところで取り上げたように、「聞こゆ」に品物をさし上げる意があることを考えると、帝を主語として「御隨身などをさし上げなされた。」の意にとることが可能である。しかし前の文で述べたことに類する内容であるのに、主語が異なるのが気になる。

御隨身が以前そのままの場合、関白師実について「大将はのかせ給ひて、御隨身猶賜らせ給ひ、」(一一二頁一〇行)という用例がある。隨身、御隨身には「いただく」意の「たまはる」を用いるのが「今鏡」の通例である。ただこの四行後では「関白のかせ給ひても、御隨身はもとのやうに使はせ給ひき。」としている。両例の間には「内舎人の隨身給はり給ふ。」もあり、「たまはる」が続いたので「使ふ」を用いたのかもしれないが、授受表現ではない表現を用いていることに注目したい。

例二六の場合も、直前に「たまはる」があるので「聞こゆ」を用い、「御隨身などが世に広く伝わっていらっしやうた。」という、授受表現でない表現をしたのではないか。ただ、この段落で前東宮には最高敬語「せ(させ)給ふ」が用いられているので、「聞え給き」であるのは気になるが、その問題は「聞こゆ」を「さし上げる」意とった場合にも、帝について生じる。例二六の「聞こゆ」は「世に広く伝わる」意にとりたい。

例二七 大将殿、いづれの程にか侍けむ、年ごろ住み給し冷泉ひむがしの洞院よりにや侍けむ、七夜、かちより御束帯にて、石清水の宮に参り給けるに、光清とか聞へし別当、御まうけ誰が房とかいふにして御気色聞へけれども、事さらにたちやどる事なくて、「この度は参らむところざしたれば、えなむ入るまじき」とて、より給はざりけるに、(二四四頁一行)

「ふちなみの上第四 ふしみの雪の朝」に次のような箇所がある。大殿(師実)が雪の朝、伏見の修理の大夫俊綱のもとを突然訪れて御馳走を要求する。その時、「家の司なるあきまさといひて、光俊、有重などいふ学生の親なりし男、けしき聞えければ、」(九九頁七行)俊綱が戻って来て、御馳走は不可能だと言う。「けしき聞えければ」とあるが、「けしき」に「心中にいだく考えを内々に示すこと。また、その考え。意中。意向。」の意があるので、「意向を申し上げたところ」という訳でよい。俊綱は、師実とかかわり合う場面では地の文で通常語で待遇されるが、前後の叙述では尊敬語で待遇されているので、家司あきまさから俊綱への動作には謙讓語「聞こゆ」が用いられたと考えることができる。

例二七の「きそく」も「意向」の意ととってよいであろうが、「気色聞へけれども」でなく、「御気色」となっている。『角川古語大辞典(二)』「きしょく」の項(一)④は「表情やしぐさをもって、それとなく知らせるための合図。」であるが、そこに用例として挙げられている「成範の中納言、御気色申されたりければ、法皇寝殿の橋がくしの間へ御幸なつて、待まいらつさせ給ひけり」(平家・四・厳島御幸)の「御気色」は、成範が尊敬語待遇の人物であることから、成範に対する尊敬語ととりうるが、例二七の光清は通常語待遇の人物であるので、「御気色」を光清に対する尊敬語とはとれない。この「御」は「気色」の向かう先である大将殿(有仁)に対する敬意表現、すなわち謙讓の「御」なのではないか。直前に見られる「御まうけ」の「御」は謙讓と考えざるをえない。

そのように見てくると、「平家物語」の「御気色申されたりければ」の「御」も「気色」の向かう先である法皇への敬意表現、つまり謙讓の「御」の可能性があると思えてくる。また、「ふしみの雪の朝」で「けしき聞えければ」となっており、「御けしき」となっていないのは、「けしき」の向かう先である俊綱が、師実の前では地の文で通常語で待遇されてしまう人物であるからかもしれない。以上のことから、例二七の「御気色聞へけれども」の「御気色」「聞こゆ」ともに謙讓語ととっておきたい。「聞こゆ」は「申し上げる」意である。

例二八 女なりける人は、院の宮くなど生みたてまつりたりけるが、まだ若くをはしけるに、「京へ送りつる人、この歌を詠み置きたる、返しをやし侍るべき。また迎へや返すべき」と申あはせければ、「返しは世の常の事に侍。迎え給えらむこそ、歌の本意も侍らめ」と聞えければ、心にやかなひけむ、その日のうちに、迎えにさらにやりて（二八一頁二行）

石清水八幡宮別当光清が娘（美濃）に「申あはせ」たところ、美濃が考えを「聞え」たというものである。美濃は後に院の宮々を生んだので、地の文で尊敬語「おはす」が使用されている。その美濃に相談したので謙讓語「申し合はす」が用いられている。これに対して美濃が光清に言う動作に「聞こゆ」が用いられているが、光清が地の文で通常語で待遇されているため、この「聞こゆ」を「申し上げる」意の謙讓語と見ることはできない。血縁関係の上では美濃が下位、光清が上位であるので、その上下関係のみを謙讓語「聞こゆ」を用いて表したのではないかと考える。

穂田氏が挙げている「源氏物語」の用例（筆者が前後を省略）、「（明石姫君ノ乳母ガ）うち笑ひて、女君（明石上）にかくなむと聞ゆ。（明石上ハ）なかなか物思ひみだれて臥したれば、とみにしも動かれず。」がこの類の表現であるが、氏は「聞こゆ」にはこのような「常位者を待遇の対者とする表現が稀なこと」<sup>18</sup>を指摘している。例二八は「聞こゆ」の

珍しい用法ということになる。なお、「聞こえ給ふ」のように美濃に尊敬語が使用されていないのは、ここでは光清の娘であることだけが強調されたためであろう。例二八は謙讓語「聞こゆ」が受け手尊敬性を捨て、関係規定性のみで用いられたものと考えたい。

例二九 女車、物見にやりもてゆきけるに、重通の大納言、宰相の中将にをはしけるほどにや、車やりつゞけて、見知りたる車なれば、便よきところに立てさせなむとして、後に我隨身を女車にやりて、(句)とかや聞えければ、

女房の車より、(句)とぞ、いひかはしける。(二八四頁五行)

宰相の中将(重通)が隨身を使って女車に連歌をしかけたという場面である。女房に尊敬語が用いられていないので、この「聞こゆ」を「申し上げる」意の謙讓語と見ることはできない。また、重通が女房より下位であるという客観的な上下関係も認められない。しかし、重通が隨身を介して女房に名を尋ねているのに女房がすげなく断っているので、これを描写する「今鏡」の語り手は、少なくとも当事者どうしの意識としては、重通が下位、女房が上位であったであろうととらえているのではないか。それが「聞こゆ」の使用に現れたと言つてよいと思う。以上のことから、例二九の「聞こゆ」も例二八と同様、謙讓語「聞こゆ」が関係規定性だけで用いられたものと考えたい。

例三〇 法性寺のおとゞ、御髪おろし給て、御戒の師にし給とも聞えき。狛の僧正ともなひて、天王寺へ参り給けるに、難波お過ぎ給とて、(歌)となむ聞えし。(二四九頁一四行)

法性寺の大臣(忠通)が狛の僧正(行慶)と天王寺に参詣した折、難波を過ぎるということで「ゆふぐれに難波わたりを来て見ればたゞうすゞみのあしでなりけり」と「聞え」たところである。行慶は尊敬語待遇の人物なので、

「忠通が（歌）と行慶に申し上げた。」ととれないこともないが、二人のやりとりが描かれている場面ではないこと、忠通への尊敬語がないことから不自然と考える。また、仮に美化語の「聞こゆ」が発生していたとしても、やはり忠通への尊敬語がないので、これも採らない。

ここは「（歌）と詠み給けるとなむ聞えし。」とあるべきところである。ただし、「と詠み給ける」を意図的に省略したとは考えにくい。「今鏡」には「と詠ませ給へりけるとぞ聞へ侍りし。」（六三三頁六行）、「など詠まれ侍けると聞え侍し。」（七九頁一〇行）、「と侍りけるとぞ聞え侍し。」（一六七頁二行）、「と詠ませ給へりけるとぞ聞え給し。」（二五五頁一行）のような整った表現が散見するからである。「と詠み給ける」は無意識のうちに脱落してしまったと考えたい。なお、この「聞こゆ」は「世に広く伝わる」意である。

#### 四 おわりに

五一七例の「今鏡」の「聞こゆ」の約七七パーセントが「世に広く伝わる。評判される。」意の用例であり、謙讓語の用例は約一四パーセントに過ぎない。また、一〇例の疑問例がある。それらを検討した結果は次のようであった。

1 「源氏の中將を、入道おとゞの御やしなひ子と聞え給。」（例二二）は、その前後における、入道おとゞと源氏の中將に対する敬語の用い方から考えると、混同例である可能性が大きい。

2 「前の東宮に院号聞えさせ給て」（例二二）の「聞こゆ」は「さし上げる」意の可能性もあるが、「世に広く伝わる」意と考えたい。

3 女院についての「院号聞えさせ給ふ」（例三三・二四）の「聞こゆ」も同様である。

- 4 「親王の宣旨聞えさせ給ひし。」(例二五)の「聞こゆ」も同様である。
- 5 「御隨身など聞え給き」(例二六)の「聞こゆ」も同様である。
- 6 「御気色聞へけれども」(例二七)の「御気色」は謙讓語、「聞こゆ」は「申し上げる」意とりたい。
- 7 例二八の「聞こゆ」は謙讓語「聞こゆ」が関係規定性のみで用いられている可能性がある。
- 8 例二九の「聞こゆ」も同様である。
- 9 例三〇の「聞こゆ」は「世に広く伝わる」意で、その前には脱落があると考える。

以上のことから、「今鏡」には謙讓語「聞こゆ」の衰退の様相と、一部に混乱や稀な用法が見られることが明らかになった。老女が語り手であるという特殊性はあるが、院政期の敬語の側面を示すものとして、「今鏡」に目を向けることには意義があると考える。

注

- (1) 川岸敬子『「今鏡」の「今鏡殿参り侍なむ」について』(『明治大学教養論集』三七七号 二〇〇四年一月)五三―六七頁。
- (2) 桜井光昭著『敬語論集——古代と現代——』(明治書院 一九八三年)九六頁。
- (3) 板橋倫行校註『今鏡』(朝日新聞社 一九五〇年)本文の底本は畠山本。
- (4) 穂田定樹著『中古中世の敬語の研究』(清文堂 一九七六年)二五六―二六四頁。
- (5) 日本国語大辞典第二版編集委員会・他編『日本国語大辞典 第二版(四)』(小学館 二〇〇一年)「きこゆ」は項目のみ。
- (6) 榊原邦彦・他編『今鏡本文及び総索引』(笠間書院 一九八四年)
- (7) 複合動詞「きこえかはず」、名詞「きこえ」は含まない。
- (8) 複合動詞「まうしあはず」、名詞「よろこびまうし」などは含まない。なお、前記総索引の「まうす」の項に「ますも看ヨ」(特記以外ハ漢字表記ニツキまうすカますカ不明)とあるので、「ます」も含めた。

(9) 海野泰男著『今鏡全釈(上・下)』(福武書店 一九八二・一九八三年)(パルトス社より上・下合本復刻版発行 一九九六年)

本文は島山本を活字化した新訂増補国史大系『今鏡』を底本とする。

(10) 竹鼻績全訳注『今鏡(上・中・下)』(講談社 一九八四年)本文は慶安三年刊行の『統世継』を底本とする。

(11) (4) 同書二六三頁。

(12) 中村幸彦・他編『角川古語大辞典(二)』(角川書店 一九八四年)

(13) 「二三九 すみの江のおきなすがたぞあはれなるうみにおいつつこしのかがる」(『新編国歌大観 三 私家集編I歌集』角

川書店 一九八五年)の詞書。

(14) 『日本国語大辞典 第二版(二〇)』に「」の項一(格助)⑩。

(15) (5) 同書「けしき」の項(二)②。

(16) (5) 同書「きそく」の項③に「他に對する氣持や意向、要望。内意。きしよく。」とある。

(17) (4) 同書六三頁。

(18) (4) 同書三三四頁。

(19) 辻村敏樹著『敬語の史的研究』(東京堂出版 一九六八年)所収の「敬語変遷一覧表」などにあるように、「申す」は中古から美化語化している。そのことを考えれば、「聞こゆ」の美化語化もありえないことではない。

(かわぎし・けいこ 商学部教授)